



排水対策に用いる農業機械は、収益に直接影響することが少ないため、導入する時に必要な判断材料が少ない状況です。そこでキャベツやレタスなど10月に定植する露地野菜圃場（ほじょう）で、新たに排水対策用の農業機械導入を検討する時に役立つ作業可能面積および損益分岐点を明らかにしました。

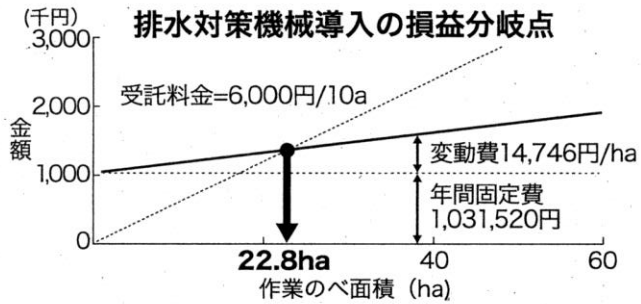
排水対策に使う機械は35馬力級トラクターと、弾丸暗渠（あんきょ）を施工する振動式サブソイラー、明渠を造る溝掘り機の二つのアタッチメントです。これらの機械の1時間当たりの作業面積は弾丸暗渠施工が0.31畝、溝掘りで

は2110畝の施工が可能です。7～10月の排水対策の施工期間のうち、56日作業できると想定すると、それぞれ作業可能面積は弾丸暗渠56.5

### 露地野菜の排水対策

## 農業機械導入の目安 損益分岐点は22.8<sup>ヘクタール</sup>

畝、溝切6200畝になります。これらの機械を新規で導入し、トラクターは他の作業でも使う（50%案分）と仮定すると、年間固定費は103万



15200円、1畝当たりの機械利用経費は1万4746円と試算されます。本機械化体系で排水対策の作業を受託し、受託料金を10<sup>ヘクタール</sup>当たり6000円とすると損益分岐点は22.8<sup>ヘクタール</sup>になります。図。（県農林技術開発センター 畑作営農研究部門 干拓営農研究室 専門研究員 宮崎朋浩）